NOTEBOOK

あるべき未来に進むために

A　普通横罫 40枚 ノ−200PX

NOVEL

あるべき未来に進むために　5

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15367784

ダイの大冒険, アバン, マトリフ, ロカ, ヒュンケル, レイラ, マァム, アバフロ, 子ヒュン, フローラ(ダイの大冒険)

前半終了。
襲撃事件後始末からアバンの旅立ちまで。
書きながら、アバンパーティにおけるマトリフの存在感の大きさを実感した一幕。

2022.07.07 2ページ目末尾修正（獄炎5巻合わせ）。

Table of Contents

あるべき未来に進むために　5

第５章　出立

　マトリフは、ベッドのうえにうつぶせに寝かしたヒュンケルの口元に、麻布を差し出して咥えさせた。
「坊主、これ噛んでろ。かなり痛むからな。・・・舌、噛むなよ。」
　そう言うと、マトリフは、手元に置いたろうそくの炎で、長い針を炙った。
「・・・行くぞ。」
「・・・ッ！！」
　マトリフが、ヒュンケルの切り裂かれた背に手を置くと、ヒュンケルが声にならない悲鳴を上げた。
　部屋の隅で、レイラが、催眠呪文で眠るマァムを腕に抱いたまま、耳をふさぐようにうずくまった。
　しばらくして、マトリフの手が止まった。
　ベッドの上でぐったりと倒れこんだヒュンケルに、マトリフは催眠呪文をかけて眠らせた。
　マトリフは、ベッドから離れると、同じ部屋の中で座り込んでいたロカとアバンに近づいた。
「終わったぜ。
　結構深い傷だったな。縫うしかなかったが、血も止まったし、回復呪文もかけた。ただ、だいぶ血が減っているな・・・。１～２日のうちは急変も覚悟しておけよ。
　レイラがベホマかけておいてくれたのがまだよかった。あれがなかったら、たぶん、ここまでもってなかっただろうな。」
「ありがとうございます、マトリフ。」
　アバンは、厳しい表情を崩していなかったが、マトリフに丁寧に礼を述べた。
　マトリフも険しい表情のまま言葉をつづけた。
「ただ、助かったとしても、痕は残るな。時間がたてば薄くはなる

だろうが・・・。」
「そうですか・・・。」
「いまは寝かしとくしかねぇだろ。坊主とマァムには、ラリホーもかけといたから、そう簡単に起きねえよ。」
　マトリフはわざとぶっきらぼうな物言いをした。
　レイラは、ヒュンケルの措置が終わった後、ようやくマァムをベッドに下し、彼の隣に愛娘を寝かした。この部屋には、ベッドは一つしかなかったからだ。
　アバンは、デスク前の椅子に座り、ロカとレイラは、窓際のソファに座っていた。ロカは、自分の肩にもたれかかるレイラの頭を抱き寄せていた。
　レイラは、小刻みに手を震わせており、頬には涙の跡があった。
「・・・いったい、何があったんだ、レイラ。」
　おそらく、この中で最も冷静に話せるであろうマトリフが、窓際で壁にもたれかかったまま、レイラに声をかけた。
　アバンが、自警団に呼ばれ、ロカとともに駆け付けたとき、彼の目に飛び込んできたのは、半壊したロカたちの家だった。
　ロカたちの家は、玄関ドアが破られ、蝶番が外れかかって傾いており、２階部分はほぼ原形をとどめていなかった。屋外からも、２階の天井の裏が見えるようなありさまだった。
　辛うじて、２階の床は残っていたが、床板の一部はめくれ上がり、いつ底が抜けてもおかしくないように見えた。
　その崩壊した２階のがれきの中で、レイラは、マァムとヒュンケルをかばった姿勢のまま埋もれていた。
　レイラの背中には、崩れ落ちた２階の壁や天井の破片が当たり、あざになっていた。
　だが、ヒュンケルの傷は、比べ物にならないくらいひどかった。
　背中に大きく切り裂かれた跡があり、表皮だけでなく、筋肉まで至っていたのであろう、血が噴き出して、少年の体の下に血だまりを作っていた。
　そのヒュンケルの出血を止めようと、レイラが必死に回復呪文をかけ続けていた。
　アバンの後から駆けつけてきたマトリフが、すぐにヒュンケルを

受け取り、隣のアバンの家にヒュンケルを運び込んだ。こちらは、襲撃を免れており、損傷はなかった。
　しかし、ヒュンケルの傷は思ったよりも深く、回復呪文だけでは間に合わないと判断したマトリフは、その傷を針で縫うことにした。傷口を縫合したうえで、回復呪文、催眠呪文を併用し、血液量と体力の回復に努めた方が、命をとどめるのに適しているとの判断だった。
　マァムにけがはなかったが、周囲の異常事態を感じ取り、泣き止まなかった。
　マトリフは、マァムにも催眠呪文をかけ、そろって寝かせて、子どもたちを落ち着かせたのだった。
　ようやく子どもたちへの措置が終わり、だが、彼らを一人にすることもできず、アバンたちは、子どもたちの眠る部屋にそのままとどまっていた。
　話し合うべき、相談するべき事柄は大いにあったが、誰も言葉を継げず、沈黙が流れていた。
　マトリフから声をかけられたレイラは、震える手を抱えたまま、下を向き、何も言葉を発することができなかった。
　そんなレイラを、ロカが黙って抱きよせていた。
　ロカも、唇をかんだまま、厳しい表情を崩していなかった。
　マトリフは、この状態のレイラに話をさせるのは酷だと感じたのか、アバンに視線を移した。
「・・・アバン、お前の家は無事だった。襲撃されたのは、ロカの家の方だ。これは、ロカとレイラが狙われたとみるべきか？」
　すると、レイラが、震えながらつぶやいた。
「・・・違うわ、マトリフ・・・。狙われたのは、私じゃない・・・。」
　レイラは、そこでいったん言葉を区切り、沈黙した。
　ためらっていたが、意を決したように、彼女は語った。
「狙われたのは・・・マァムだったわ・・・。」
「ど、どういうことだ、レイラ！！なんでマァムが！」
　衝撃的な言葉に、ロカが叫んだ。
　レイラは、ロカを見上げた。

「私も、始めはロカと私が狙われたんだと思ったわ。勇者のパーティということで。
　だから、私は、マァムをベッドの下に隠して、ヒュンケルを逃がして、自警団の屯所まで、助けを呼びに行ってもらおうと思った・・・。
　でも、彼らは、ヒュンケルを逃がさなかった。むしろ、私よりも、ヒュンケルを執拗に攻撃したの。あの子が、剣の指導も受けていないような普通の子どもだったら、すぐに殺されていたわ。
　そして・・・そして・・・ベッドの下のマァムを見つけると、彼らは・・・！」
　レイラは、それ以上は言葉にならなかった。頬を涙が伝っていた。
　ロカはより強く、レイラを胸にかき抱き、自身も悔しそうに顔をゆがめた。
　マトリフは、処置したばかりのヒュンケルの傷を思い浮かべた。背中が深く斬られていた。子どもではあるが、ある程度訓練を受けたヒュンケルが無防備に斬られていることに違和感があったのだが、レイラの言葉を聞いて、納得した。
　マトリフは、合点がいったように言葉をつないだ。
「それを坊主がかばったってことか。」
　レイラはうなずいた。
「彼らが狙ったのは、一番にはマァム・・・それに、たぶん、ヒュンケルも・・・。
　彼らは、今晩、ロカもアバン様もいないことを知っていたのよ・・・。」
　すると、それまで沈黙を貫いていたアバンが口を開いた。
「・・・つまり、なんですか、この襲撃者たちは、戦う力の乏しい、弱い子どもたちを狙ったと、こういうことですか？」
　アバンは、皮肉のような、ひきつった笑みを浮かべていた。
　ロカもマトリフも見たことのないような、不自然な表情だった。
　たぎるような怒りを懸命に押さえつけて無理やり笑顔の仮面で覆っているかのようであった。マトリフは、アバンの底知れぬ怒りを感じた。

マトリフは、つとめて冷静にアバンに話しかけた。
「アバン、襲撃犯の目星、ついてるか？」
　アバンは、表面上は冷静に取り繕った声で答えた。
「・・・今のこの状況だけでは何とも。ですが、備えはしていたつもりです。」
「このままで済ますつもりは・・・ねぇな？」
「当たり前です。」
　言葉の端々に強い怒りがみなぎっていた。
　マトリフは、アバンの思考を問うた。
「狙いは何だと思う？」
　アバンは首を横に振った。
「狙いは、私、でいいんでしょうがね・・・。
　・・・ただ、不自然なんですよ。私が邪魔で、排除しようというだけなら、なにも、こんなやり方をする必要はないはずです。子供を狙うなんて露骨すぎます。こんなことをやったら、市民の反発も招きますし、私のことを邪魔に思う者がやってますって、札つけて言っているようなものなんですよ。」
　マトリフもうなずいた。
「・・・ああ、それは俺も思った。やり方が、無謀すぎる。」
　すると、ロカがいらだちを隠しきれないかのように、声を上げた。
「そんなのどうでもいいだろ！大事なのは、マァムまで狙われたってことなんだ！こんな危険なところにマァムを置いておけねえよ！」
　マトリフがロカをなだめた。
「落ち着け、ロカ。同じことはもう起こらない。起こるはずがない。」
　だが、ロカは引かない。
「なんでそんなことが言えるんだなよ！」
　マトリフが、一層強く、ロカをたしなめるように言った。
「奇襲や暗殺ってのは、相手が油断した時にやらねえと意味がないからだよ。」
　マトリフは、つづけた。

「今回こんなことがあったんだから、王は、その威信にかけてでもアバンを守るだろうよ。警備も何倍にもしてな。それをかいくぐって、同じことはできねぇよ。」
　冷静に考えればそうなのだろう。
　だが、誰も予想をしていなかった万に一つの事態が、今晩起きたのだ。
　アバンが狙われていることは、マトリフも、アバン自身も分かってはいた。
　だから、嫌がらせなども含めて、被害を受けないように、ロカやアバンが不在の時には注意するようにレイラに言っておいたし、もしものことも考えて、アバンはレイラに仕掛けを授けてもいた。
　だが、ここまでの事態は想定していなかった。
　まさか、王都の真ん中で、アバン不在の隙をつき、自宅を襲撃して子どもたちを狙うなどという、そんな卑怯な行いがなされるとは思っていなかったのだ。
　だから、ロカは、今後のことは少しも安心できていなかった。
　合理的にはマトリフの言うとおりだとしても、相手が理性的に行動しない可能性もあるのだから。
　ロカは声を上げた。
「そんなの保証できないだろ。相手がよりバカだったらどうするんだよ。今回失敗してるんだから、焦って同じことやってくることだってありうるだろ。」
「まぁ、保証はできねぇがな。」
　マトリフはため息を吐いた。絶対の安全など保障できないのは、ロカの言うとおりだ。
　マトリフは、アバンに話を振った。
「アバン、どうする。」
　アバンは、手元に視線を落としたまま、マトリフの問いかけに答えた。先ほどよりは少し様子が落ち着いていたが、やはり、無理に、強い怒りを押し殺している様子だった。
「おそらくは、どこかに先王派が絡んではいるのでしょうが、マトリフの言うとおり、今の時点では、相手の狙いが読み切れません。
　ですが、このままで済ますわけにはいきません。このお礼は、

きっちりさせていただきませんとね・・・！」
　その面には、不自然な笑みがあった。
「あてはあんのか？」
「一応、警戒はしていたんですよ。ただ、もう、陛下にお断りを入れたから大丈夫かと思っていたんですが・・・甘かったですね。私の失敗です。」
　アバンは、悔しそうに唇をかんだ。
　マトリフは、アバンに尋ねた。
「一人は自警団が捕まえたって言ってたろ。そいつから聞き出すか。」
　アバンは、答えた。
「それはもちろんですが、残りも逃がすわけにはいきません。」
　襲撃犯の一人は、レイラのバギクロスで２階から吹き飛ばされた衝撃で、付近の路上に昏倒して倒れていた。そこを、騒ぎを聞きつけた自警団に取り囲まれ、あえなく、一人は御用となった。
　だが、残りの４人の行方はつかめていなかった。
　アバンは、レイラに尋ねた。
「レイラ、置いておいてくださいましたか？」
「・・・あ、はい・・・。」
「ありがとうございます。」
　アバンは、マトリフに答えた。
「変な人が来た時のために、玄関に仕掛けを作ってはおきました。玄関をこじ開けると、それが落ちてくるようにね。」
「なんだ、それ。」
「目印です。これをたどって、犯人にたどりつけるようにね。」
　アバンは不敵な笑みを浮かべていた。
「襲撃犯は、必ずとらえて司直に引き渡します。」

　その晩は、ロカ夫婦が子どもたちの眠る部屋に泊まり、アバンとマトリフは、その隣の部屋で休むことになった。ベッドとソファでの雑魚寝になるが仕方がない。誰もが一人になることを恐れていたし、子どもたちのそばにいたかった。
　アバンは、眠れないまま、ソファで寝返りを打った。ベッドは年

長者のマトリフに提供していた。
　アバンの脳裏に浮かぶのは、あの地の底の城で、床に頭をつけて懇願する骨の騎士の姿だった。
—申し訳ありません・・・バルトスさん・・・。
　ヒュンケルを預かったのに。人間の温もりを教えると約束したのに。
　彼を守り切れなかった。危険な目に遭わせてしまった。
　それも、自分のせいで。
　ロカの言うとおりに孤児院に預けていれば、ヒュンケルはこんな目に遭わずに済んだのだろうか。アバンの身の内を、懺悔と後悔が渦巻いた。
　アバンは、まんじりともできないまま、ベッドの上で虚空を眺めていた。
　ふと、そのとき、階下から物音が聞こえた。
　玄関のドアノブを回す音がする。
　アバンは、体の内側がすっと冷めていくのを感じた。
　彼らしくなく、仮面のような凍り付いた表情のまま、アバンは、壁に立てかけてあった剣を手に取った。

　アバンは、音を立てずに階下に降りて行った。
　息をひそめ、気配を殺したまま、玄関ドアの内側に立った。手には、抜身の愛刀を携えていた。
　ドアの外側に人の気配がある。
　ドアノブを触る音はやんでいたが、ドアが開かないにもかかわらず、外の気配はそこから去らない。
　何を狙っているのだろうか。家の中に立ち入る隙を探っているのか。
　ならば。
　アバンは、内側から勢いよくドアを開けた。
　軽い身のこなしで外に飛び出し、手に持った抜身の剣を横から大きく振って薙ぎ払った。
「きゃあっ！！」
　女性の悲鳴が響いた。

驚いたアバンは、慌てて剣の向きを変えた。
　急に剣の振りを止められず、アバンは、わざと自分の足を崩し、無理やり剣の軌跡を沈めた。
　その反動で、自分の姿勢が前に倒れた。
　不自然な姿勢で倒れながらも、アバンはすぐに顔を上げ、そこに立ちすくむ人物を見上げた。
「フローラ様・・・。」
　『希望の女神』王女フローラが、泣き出しそうな少女の顔で、その場にたたずんでいた。

　アバンは、誰にも見つからないように、急いでフローラをリビングに招き入れた。
　ランプに火をともすと、温かみのあるオレンジ色の光がリビングに広がった。
　フローラは、リビングの椅子に座り込んだまま、うつむき、凍り付いたように動けずにいた。
　アバンは、かまどの火をおこして湯を沸かし、お茶を入れた。
　フローラが落ち着くのを待つように、ゆっくりと時間をかけて。
　そして、たっぷりと時間をかけたハーブティをフローラの前に差し出した。
「どうぞ。カモミールとラベンダーに少しリンデンをブレンドしてあります。甘い香りですよ。」
　フローラは、アバンの言葉にうなずくと、両手でカップを持ったまま、幼児のように、温かいお茶を口に運んだ。
　その様子に、アバンは少しだけ、胸をなでおろした。
「・・・お一人で、城を抜けてこられたのですか？」
　アバンの問いに、フローラは、黙ってうなずいた。
「ご承知のとおり、今晩は、事件がありましたから。危険です。すぐにお城までお送りしますよ。」
　アバンの言葉に、フローラは、懸命に首を横に振った。
「姫。」
　フローラは、うつむいたまま顔を上げなかった。
　普段の気丈な王女の様子はなく、弱弱しい少女の姿を見せてい

た。
　フローラは、しばらく黙ったままでいた。
　アバンも、彼女を急かさなかった。ただ黙って、フローラとともに沈黙に身をゆだねていた。
　やがて、フローラが、零れ落ちるように、言葉を口にした。
「・・・あなたの身に・・・危険が、及んだのかと思ったわ・・・。」
　不自然に言葉を区切り、かろうじてそれだけをフローラは口にした。
「ご心配をおかけして申し訳ありません。私は大丈夫です。
ですが・・・ヒュンケルが大けがを負いました・・・。」
　アバンは、苦しげに言葉を紡いだ。
「あの子のことは、あの子のお父さんに頼まれていたのに・・・。
いっそ、私自身がけがを負った方が、まだよかった・・・。」
「いいえ！」
　フローラが叫んだ。その不意にあげられた気勢にアバンは驚きを隠せなかった。
　フローラは、その大きな瞳を潤ませながら言葉をつづけた。
「・・・いいえ・・・。
　ヒュンケルがけがを負ったこと、とても残念ですし・・・あんな小さい子にむごいことだわ・・・。」
　フローラは、アバンの顔を見ていられず、泣き出しそうな瞳のままうつむいた。震える声を絞り出す。
「でも、でも、私は・・・あなたが無事な姿を見て、どれだけほっとしたか・・・。」
　勇者のパーティが襲撃された、重症者が出ている、との知らせはすぐに城にももたらされた。その一報を聞き、フローラはいてもたってもいられなくなった。
　冷静に考えたら、自警団に異常を知らされ、ロカとともに、急遽王宮を辞したアバン自身がけが人のはずがない。普段の彼女なら、すぐにその思考にたどり着けたはずだった。
　だが、フローラは、すでに、アバン周辺に不穏な動きがあることを把握していた。また、アバンからは、カールを出ると告げられて

いた。
　さまざまな事情は、フローラの思考を不安定にし、アバンが永遠に失われる恐怖に駆られ、フローラは城を飛び出していた。
　王都で襲撃事件があったその夜に、供も連れずに城を出るなど、王女の責任として考えられない。普段の彼女からすれば、あり得ない行動だった。
　アバンの無事な姿を見て、フローラはようやく安堵できた。だが、またすぐに、別の懸念が彼女を支配していた。
　フローラはつぶやいた。
「あなたが無事でよかった・・・。
　でもまたいつか、同じことが起きてしまったら、今度は、あなたに・・・。あなたが・・・。」
　それ以上は言葉にならず、ぽつりと、フローラの手元に雫が落ちた。
「そうなったら、私は・・・。どうしたらいいのか・・・。」
　アバンは、フローラにそっと声をかけた。
「フローラ様、これを見てください。」
　そういって、アバンは、胸元に下げた鎖をシャツの下から引き出して見せた。手のひらに乗るくらいの、小さなペンダントだった。
　それは、フローラにも見覚えのあるものだった。
　アバンは、穏やかな笑みを浮かべて言葉をつづけた。
「あなたにいただいた、カールの守りです。
　魔王ハドラーを倒す旅の間、これがずっと私を守ってくれていました。
　フローラ様も、持っていてくださいましたか？」
「もちろんです。今もここにありますもの。」
　そういうと、今度は、フローラが胸元に下げた鎖を見せた。
　その先には、涙型の輝石が下げられていた。
　アバンが、打倒魔王の旅に出る際に、フローラとの間で、互いに与え合ったものだった。
　アバンは、笑みを浮かべた。
「よかった。
　その輝聖石は、聖なる力を高め、邪をはじく力を持っています。

きっと、フローラ様を守ってくださいます。私の代わりに。」
「代わりだなんて、アバン・・・！」
　不吉な言葉に、フローラはアバンの言葉を遮った。
　アバンの「代わり」などいらない。フローラが望んでいるものはそんなものではない。
　だが、アバンは、フローラの言葉を押しとどめると、いつものように穏やかに語り掛けた。
「フローラ様、それだけではないんですよ。
　この輝聖石は、惹かれあい、導きあう性質を持っています。この石を通じて、遠く離れていても、思いが伝わっていきます。
　私が作ったものですから、私自身にもつながっていますよ。」
　そう言って、彼は、いつもよりもずっと穏やかに微笑んだ。
　アバンは、ゆっくりと言葉を紡いだ。フローラの心の奥底まで届くように。その声は、湖面に広がる水紋のように、ゆっくりと、フローラの体にしみわたっていった。
「フローラ様、遠く離れていても、同じものを目指していれば、いつかまた道は交わります。
　同じ志を掲げていれば、いつかまた出会うときが来ます。」
　そして、アバンは、まっすぐにフローラを見つめて言葉を紡いだ。
「私は、必ずあなたの元に戻ります。ですからそのときまで、預かっていてくださいませんか。」
　アバンは、あえて「何を」とは言わなかった。
　フローラは、胸元の輝聖石を強く握った。
　アバンがフローラに預けようとしているものは、この小さな輝石だろう。だが、フローラは、どこかで、言葉以上の何かを感じていた。
　アバンは、言葉を続けた。
「まだ私にはやるべきことがあります。けれども、やるべきことを終えたと思ったそのときには、私はまた、姫のところに帰ってきます。
　そのときに、私は、勇者でも何でもない、ただの一人の人間として、フローラ様にお会いできればと思っています。」

アバンは、それに続く、胸に浮かんだ言葉を飲み込んだが、それを決して悟らせないように、やはり穏やかに微笑んだ。

　アバンが王宮までフローラを送り、自宅に戻ると、既に時刻は明け方近くになっていた。
　もう眠れそうになかったし、朝も近かったが、体を休める必要はある。アバンは、緩慢な動作で、ソファに横になった。
　不意に、暗闇の中、ベッドの上から声がした。
「姫を送ってきたのか？」
「マトリフ。起きてたんですか。」
　アバンは、半身を起して、ベッドの上のマトリフに答えた。
　マトリフは、ベッドの上で、アバンに背中を向けて横になっているようだった。
　部屋の中に明かりもなく、背を向けたマトリフの表情は見えなかった。
「お前らの話し声で目が覚めた。」
「・・・聞いていたんですか？」
「俺は耳がいいんだよ。」
　非難するようなアバンの声をマトリフは受け流して答えた。
　しばし、沈黙が流れた。
　やがて、ベッドの上から、呆れたようなため息が聞こえてきた。
「朴念仁めが。女があんな顔をしてる時はな、黙って抱いてやればいいんだよ。」
　マトリフの直截的な言い方に、アバンは声を上げた。
「なんてこと言うんですか。相手は王女ですよ。」
　だが、マトリフは、やはり呆れた声色を隠さず、アバンに応えた。
「ばーか。王女だろうが何だろうが関係ねぇよ。姫は、今晩は、一人の女として、お前に会いに来たんだろうが。」
　供も連れずに、たった一人で、危険な夜にアバンに会いに来た。
　人の心の機微に聡いアバンに、その意味が分からないはずがなかった。
　アバンは、力なくマトリフに答えた。

「・・・今はダメです。私にも姫にも、それだけの力がない。」
　マトリフはため息を吐いた。
　アバンとフローラは、それぞれ異なる役目を負っている。そしてふたりとも、それを、己の感情よりも優先させてきた。
　そのふたりの有り様が、マトリフの脳裏に、想い出の中に住む人の姿を思い起こさせた。
ーアイツも・・・周りのヤツことばっかり考えてたな・・・。
　マトリフは己の人生を振り返り、呟いた。それは、アバンに対する言葉だったのか、あるいは、己自身への言葉だったのかは、明らかではなかった。
「後悔するなよ、アバン。
　・・・俺みたいにな。」

　朝になっても、ヒュンケルは目を覚まさなかった。
　アバンは、重い心を抱えたまま。彼のベッドの側にいた。
　深い傷を、麻酔もなしに縫ったことは、幼い彼の身体には大きな負担だったのだろう。
　また、だいぶ血も減っているようだった。彼の身体は、体温が下がっているにもかかわらず、それとは不釣り合いに、その白い肌に玉のような汗が浮かんでいた。
　朝になって、今度は、レイラが回復呪文をかけてくれている。
　回復呪文の効果で、ヒュンケルの体内では、いま、急ピッチで血が作られているはずだった。失われた血を回復する手段は、ほかにはなかった。
　だが、回復魔法とはいえ万能ではない。例えば、十分な血液量が回復する前に、本人の体力や命運が尽きてしまうこともあるし、他の臓器が耐えきれなくて活動を止めてしまうこともある。だから、マトリフも、急変を覚悟しておけと言ったのだ。
　できることはみなやった。あとはヒュンケルの体力に任せるほかなかった。
　ヒュンケルは、背中を大きく切り裂かれ、そこを縫ったため、仰向けに眠ることもできず、枕や寝具で体を支えられ、横向きの姿勢で寝かされていた。

アバンは、ヒュンケルの父の姿を思い描きながら、両手で作ったこぶしを額に当て、ただ祈るしかなかった。
―バルトスさん・・・。ヒュンケルをお守りください・・・。
　何度繰り返したかわからない言葉を、アバンは、胸の内で繰り返した。
　そのまま、半日くらいが経っただろうか。
　ヒュンケルの枕もとにいるアバンへ、城や自警団からの報告が順次、舞い込んできた。アバンは、報告を整理しながら、次の一手を考える必要があった。だが、傷の痛みにうなされるヒュンケルを前に、アバンは思考がまとまらなくなっていた。
　日が傾きかけたころ、ヒュンケルがまた、声を上げた。
　痛みを訴えるうめき声に、アバンの瞳が痛ましく揺らいだ。
　そのとき、ふと、ヒュンケルの瞼がゆっくりと開いた。
　長い銀のまつ毛の隙間から、銀灰色の瞳がのぞく。
　アバンははっとして、ベッドに近づき、ヒュンケルに声をかけた。
「気が付きましたか、ヒュンケル。私がわかりますか？」
　彼の負担にならないように、アバンは、そっとささやくように呼び掛けた。
　ヒュンケルは何も答えなかった。
　目は開いているが、その瞳には何も映していないようで、ぼんやりとしたまま、アバンの方に目を向けていた。
「・・・ヒュンケル・・・。」
　アバンは、もう一度呼びかけた。
　すると、ヒュンケルの唇がかすかに動いた。
　アバンは、彼の口元に耳を寄せた。何かを言おうとしている。
　ベッドの脇にしゃがみ込み、ヒュンケルの口元に耳を寄せたアバンに、ヒュンケルの小さなささやきが届いた。
「・・・せんせい・・・。」
　アバンは、努めて優しく答えた。
「なんですか、ヒュンケル。」
　また、か弱いささやきが、アバンの耳に届いた。
「・・・マァムは・・・マァムは、無事ですか・・・？」

アバンは驚いて、ヒュンケルを見た。
　ヒュンケルは、やはりぼんやりとした瞳で、アバンを見上げていた。
　アバンは、泣きそうになりながら、涙をこらえ、そっと、ヒュンケルの髪を撫でた。
「・・・ええ。無事ですよ・・・。あなたが守ってくれましたからね。・・・ありがとう、ヒュンケル。」
　アバンの言葉を理解したのか、少年は穏やかに微笑むと、ゆっくりと目を閉じた。
　少しして、寝息が聞こえてきた。また眠りについたようだった。
　アバンは、その幼い寝顔を眺めながら、記憶の中にある地獄の騎士に向かって語り掛けた。
—バルトスさん、あなたの息子さんは、誇り高く、優しい子ですね・・・。
　この子を託してくださって、ありがとうございます。
　アバンは、そっと、ヒュンケルの髪をなでながら、胸の奥で、骨の騎士に礼を述べた。
　そのとき、不意に背後で物音がした。
　アバンが振り返ると、開かれた部屋の戸口にロカが立っていた。
　ロカは、唇をきつく結び、険しい表情のまま、アバンに歩み寄った。
「・・・意識は戻ったのか？」
「ええ、たったいま、少しだけ。」
　アバンは、ベッドの上で眠るヒュンケルに目を落としながら、言葉を紡いだ。
「この子、意識が戻って最初に口にした言葉が『マァムは無事ですか？』でした・・・。」
　その言葉に、ロカは天を仰いだ。
　険しい表情のまま、唇を固く結び、天井を見上げていた。
　何かをこらえるように固くこぶしを握ったロカが、何に耐えているのか、アバンにはよくわかった。ロカの顔を見ないように、アバンは、ヒュンケルに落とした視線をそのまま動かさなかった。
　ロカがつぶやいた。

「・・・こいつは、なんでこんな無茶をしたんだ・・・。」
　アバンは、ヒュンケルの亡き父の姿を思い浮かべながら答えた。
「マァムが、自分よりも弱くて、小さいから、でしょう。
　弱くて小さいものを守るのが、騎士ですから。」
　ロカは、やはりつぶやくような声でアバンに語り掛けた。
「アバン・・・俺は、お前に、女の子なんか好きにならない、一生、剣の道に生きるんだって言ったことがあったよな・・・。」
　アバンは、懐かしそうに答えた。
「ああ、そんなこともありましたね。」
　ロカは言葉をつづけた。
「あの頃は本気でそう思っていた。俺にとって、騎士道以上に大事なものなんてなかった。陛下のために、この身をささげて戦うことが、俺のすべてだった。」
　ロカは、そこでいったん言葉を区切った。
「でも、今は違う。
　俺には、レイラがいる。マァムがいる。あの二人を守るためなら、騎士の矜持なんて、どうでもいい。あの二人以上に大事なものなんて、今の俺にはないんだ。」
　アバンは黙ってうなずいた。
　ロカは、その面に痛みを感じている色を浮かべながら、言葉を紡いだ。
「でも、それは、この坊主の親父さんだって同じだったんじゃないか。だから・・・お前に地獄門を通らせたんだ。」
　アバンは、ロカの言葉を聞きながら、最後に見たバルトスの姿を思い浮かべていた。
　アバンは、地獄門を通り抜けるとき、軽く振り返ってバルトスを見た。
　そのとき、バルトスは、アバンに向かって、丁寧に礼をしていたのだった。
　ロカの言葉が重く響く。
「門番であるはずの騎士が、その守りを放棄するのが、どれほど重い決意なのか、俺にはわかるつもりだ。それだけで、処刑されたっておかしくない。

俺は、この坊主の親父さんとは直接言葉は交わさなかったが・・・こいつをそれだけ、大事に思っていたんだよな・・・。
その親父さんから見たら、こんなこと、望んでないだろう。
ったく、こいつは何やってんだよ。まだ自分こそが、かばわれる年の子どもだってのに。」
ロカは不満げにつぶやいた。やり場のない怒りを抱えているようにも見えた。
ロカは、アバンに言葉をかけた。
「アバン、俺はやっぱり、こいつは得体が知れないと思うし、危険だと思う。お前の寝首をかこうとしかねないとも思う。でも・・・。」
ロカは、ベッドに歩み寄ると、そっとヒュンケルの銀の髪を撫でた。
大きな手だった。
「・・・おい、坊主。
マァムを、俺の天使を守ってくれて・・・ありがとうな・・・。」
不意に、ヒュンケルの唇が動いた。ロカの手に応じて、つぶやいたように思えた。
「・・・父さん・・・。」
幼いヒュンケルのまなじりから、一筋、涙がこぼれた。

その２日後、アバンの自宅に血相を変えたロカが駆け込んできた。
「アバン！いるか？」
ちょうどリビングに降りてきていたアバンは、ロカの常にない様子に驚いた。
「ど、どうしたんです、ロカ？」
「これ見ろっ！」
ロカはそう言って、１枚の紙片をアバンに突き出した。
アバンは、そこに書かれた文面に素早く目を通した。

―勇者のパーティが襲撃された事件の真相。

過日、勇者のパーティが自宅にいたところ、不審者の襲撃を受けたのは、周知のことだろう。この事件で、まだ幼い、勇者の養い子が命にかかわる重傷を負った。幸いにして一命はとりとめたものの、まだ病床にあるとのこと。
　このような悲劇をもたらしたのは、何故か。
　偉業を成し遂げた、我が祖国の誇るべき勇者が、このような理不尽を受けてよいものか。
　勇者には、十分な恩賞もなく、あまつさえ、勇者を追放しようとの動きさえ王宮にはあるとのこと。
　我らが祖国を治める王家たれば、勇者一向に十分な褒賞を与えるのは当然であり、その身の安全を図り、水も漏らさぬ警備を敷くのは当然である。
　このような偉人にさえ、十分な手当てができない王家の現状をいかに見るや。
　我々庶民が憂き目に遭った際に、王家は我がカールの国民を守る意思はあるのか。

　一見すると、アバンたちが襲撃されたことを悼んでいるように見えるが、その実は、カール王家への批判だ。この襲撃事件を、王家批判の格好の材料にしようとしている意図は明らかだった。
　アバンは、顔色を変えた。
「ロカ、これをどこで？」
「あっちこっちでばらまかれてるんだよ。出どころはわからない。」
「・・・わざわざ印刷しているんですから、それなりの立場の人ではないとできませんよね・・・。」
　この世界では、印刷は誰でもできることではない。木版を作り、それを印刷する膨大な紙を用意するには、それなりの資金がかかる。
　また、文面の中に王家批判があるのだから、政治的な思惑があることは明らかだ。
　このビラに関しては、カールの中枢にいる人物の仕業とみるべきだろうとアバンは推測した。だが、誰の仕業なのか。

ロカはアバンに尋ねた。
「アバン、どういうことだ。この前の事件と、このビラの犯人、関係があると思うか？例の捕まった犯人、おかしなことを言ってるんだろ？」
「ええ。」
アバンは、一人だけ確保できた襲撃犯の取調べに当たっていた捜査官から、秘密裏に、男の供述する内容を聞いていた。
—子どもを狙うなんて、予定外だったんだ！最初はそんな話はなかった。
だけど、あの日、急に入ってきた最後の１人が、いきなり、勇者のところの赤ん坊と、小さい子どもを殺せって指示を出してきた。これは、さる高貴な方のご命令だと。金も弾むって言われて、急に・・・。
勇者も騎士団長もいないから、何も問題はない、誰がやったのかばれるはずもない、と。
まさか、僧侶の女と、あの坊主があんなに手ごわいだなんて思わなかったんだ！
男は、そう言っていたという。
アバンは、ビラに目を落としながら、腕を組んで考えた。
「ロカ、このビラの反応、どうなってます？」
ロカは神妙な顔で答えた。
「かなり噂になってる。とにかく、数が多いんだよ。そのうち、これ、火がついてもおかしくない。」
「・・・困りましたね。早いところ、この件の幕を引かないことには・・・。」
不意に、外から気勢の上がる声がした。
「何だ？」
ロカとアバンが外に出ると、町の中央付近になる広場に向かって人の流れができていた。
「行ってみましょう。」
ロカとアバンは、念のため、頭からマントをかぶり、人の流れの中にまぎれた。

広場ではすでに大勢の民衆が集まっていた。
　その輪の中で、大きめの木箱の上に立ち、一段高いところから声を張り上げている男がいた。その手には、何か紙片が握られていた。おそらく、ロカがアバンに見せたあのビラだろう。
「これを見ろ！
　王家はもはや、勇者を守る意思はない！
　勇者は、わが国だけでなく世界の暗雲を晴らしたのではないのか！
　その勇者が我らがカールの民であることを誇るべきではないのか！
　それなのに、何だ！
　不審者の襲撃を許し、ましてや幼い子どもが犠牲になったというではないか！
　カール人民、諸君！！
　これまでのカール王家のやり方を思い出そうではないか！
　魔王軍侵攻中、王家が何をしてくれたか！
　魔王軍に騎士団を壊滅され、少年たちで新たな騎士団を結成するしかなかったではないか！
　今の騎士団長でさえ、若干１９歳にすぎない！
　このような王家に、我が国を導く資格などない！！
　今こそ我らがカール人民の手に主権を取り戻すべきではないか！！」
　怪文書よりもはっきりとした王家批判だった。
　アバンは、男の表現に違和感を覚えた。
「人民・・・？」
　カールでは、民衆のことはもっぱら「臣民」と呼ばれており、せいぜい、「国民」という表現が使われるくらいだ。「人民」という言葉は、一般には使われていない。しかし、最近の先鋭的な思想の中では好んで使われていた表現だった。
「アバン？何かおかしいのか？」
　ロカが尋ねた。
「『人民』という表現は、一般の人は使わない表現です。最近現れ始めた思想書の中では使われているのですが・・・。」

「思想書？」
「ええ。王政に反対し、市民の代表が国家の意思を決定すべきという思想です。その考え方を支持する人々の間で使われている表現なのですが、それをわざわざ使うということは・・・。」
「あ、勇者様だ！！」
　民衆の中から、アバンを指さす者がいた。
　一斉に人々の視線がアバンに集まる。マントで顔を隠し直そうとしたが遅かった。
　たちまち、アバンの周りに人だかりができ、アバンは身動きが取れなくなった。
「勇者様！！」
「ご無事ですか！」
「すごい、本物だ！」
　興奮した熱気の中、木箱の上の男が、口の端をゆがめて笑みを浮かべるのを、アバンははっきりと見た。
　男は声を上げた。
「カール人民諸君！！
　勇者がお見えだぞ！
　勇者が我らの声に賛同してくれた！
　勇者は我らとともにある！
　王家など恐れることはない！」
　アバンは、男の言葉に背筋を凍らせた。
―まずい、このままでは・・・。
　ロカが、人々の波をかき分け、アバンの手を取る。
　その場からアバンを連れ出そうとするが、人の輪に立ちふさがれ、前に進めない。
　アバンは焦った。
―このままでは・・・カールは分裂する！

　男たちは、隣国アルキードとの国境近い山の中で野営をすることにした。
　早くカールの王都から遠ざかりたい。カールから出国してしまいたい。

王都からこの付近の村までは、いくつかの村を経由した上、キメラの翼で飛んできたのだが、その先については、彼らには地縁がなく、歩いていくしかなかった。
　そして、小さな村には不釣り合いな荒い雰囲気の男３人組では、すぐに不審さを感じとられ、下手をすると通報されかねない。男たちはすぐにその村を出て、野営をするほかはなかった。
　この国を出れば、追及は困難になる。
　あと１日あれば、国境を超えることができるはずだ。
　男たちの一人がつぶやいた。
「大丈夫かな・・・あいつが捕まったままじゃないか。」
　すると、別の、年長の男が答えた。
「あいつにはどこに逃げるかまで言っていない。俺たちまでは手が及ばないだろう。」
　だが、先の男は不安を隠せず、さらに問いを重ねた。
「それに、最後に入ってきたやつ・・・あいつもいつの間にかいなくなってた。・・・何者だったんだ？」
　その言葉を、年長の男が遮った。
「余計な詮索はしないことだ。最初の依頼だって、顔を隠した男からだっただろう。・・・まあ、口ぶりから、どこ系のやつなのかはわかったけどな。
　俺たちみたいなまっとうな仕事をしていない奴に、勇者の襲撃なんて依頼してくるんだから、推して知るべしだ。」
　すると、今度は、また別の、幼い顔をした男が不満げに口を開いた。
「ただ、最初は、勇者か騎士団長をちょっと怪我させればいいって話だったじゃないか。それが急に、勇者の留守に子供を殺せだなんて・・・。」
　だがその言葉も、やはり年長の男が遮った。
「それ以上は言うな。俺たちは金をもらえば何でもやる。それだけだ。
　それよりも、お前、その頭の後ろの髪、どうにかならないのか。」
　幼い顔をした男は、年長の男の指摘を受け、後ろ髪に手をやっ

た。
「ああ、洗ったんだけど、落ちないんだよ。そんなに目立つか？」
「夜だとかなり目立つな。
　なんでそんなことになったんだ？」
　幼い顔をした男の後頭部の髪は、暗闇の中、ほんのりと光を帯びていた。
　昼間は周囲の明かりがあって気付かなかった上、後頭部なので、本人も異変に気付きようもなかった。
　幼い顔をした男は首を傾げた。
「さあ・・・あの襲撃の時に、玄関ぶち破ったら、何か落ちてきたんだよ。軽いものだったし、頭に当たっただけだったから気にもしていなかったんだけど・・・。」
　騎士団長宅を襲撃した時を思い起こしながら、幼い顔をした男は言葉を紡いだ。
　年長の男は容赦なく宣告した。
「落ちないなら、髪ごと切れ。」
「い、いや、待ってくれよ。」
　慌てて自分の髪に手を当てる男に対し、年長の男は言い放った。
「こっちは隠れて行動しているのに、夜にそんな光った頭をされたら目立ちすぎる。こっちの身が危ない。」
　すると、不意に、暗闇から声が響いた。
「・・・へぇ、やっぱりあなたたちだったんですね。」
「誰だ！！」
「こんばんは。お会いするのは初めてでしたね。」
　まだ少年と言ってもよさそうな、若い男が暗闇から姿を現した。
　その面に笑みを浮かべてはいるが、不釣り合いに殺気を身にまとい、手には剣を持っていた。
　若い男は不自然な笑顔のまま、男たちに説明をした。それもまた、この場の雰囲気には不釣り合いに緊張感に欠けた言葉だった。
「一応解説しますとね、そちらの方の髪が光っちゃっているのは、ルラムーン草の粉末を浴びたからです。夜に光る性質がある草なんですよ。その粉末を袋に入れて、ロカの家の玄関に仕掛けておいたんです。目印にしようと思ってね。

その上で、騎士団から各村々に情報提供を求めたんですよ。頭かどこかがうっすら光っている男はいないかってね。
案の定、目立つもんですから、あっちこっちの自警団や警備兵から情報入りましたよ。
後頭部がうすぼんやり光った男がいるって。フードで覆ったくらいじゃあ、隠しきれなかったみたいですね。
ついでに言うと、髪を切ってもダメだったと思いますよ。うなじまで染まっているはずですからね。」
年長の男は剣を構えて対峙した。相手の男は、言葉は間延びをしているが、隙が無い。
「お前・・・勇者だな？」
若い男は笑みを浮かべたまま答えた。
「襲撃する相手の顔くらい覚えておいたらどうです。」
年長の男の言葉を否定はしなかった。
アバンは、言葉をつづけた。
「私もね・・・自分がお人よしだって自覚はあるんですよ。
ですがね・・・大事な子を傷つけられてまで、罪を憎んで人を憎まず・・・なんて言えるほど、私は善人じゃないんです！」
アバンは、一瞬にして笑みを消すと、剣を構え、男たちにとびかかった。
手前にいた、ルラムーン草をかぶった幼い顔をした男を一撃で薙ぎ払い、返す刀で追う一人の男に切りかかった。
男たちはよけようとするものの、アバンの攻撃は深く、たちどころに腕を切られた。
年長の男が叫んだ。
「相手は一人だ！一斉にかかれ！！」
年長の男の号令の下、残りの男２人が、年長の男のタイミングに合わせて左右からアバンにとびかかった。
アバンに三方から白刃が迫る。
アバンは右手に持った剣を下げた。
左手を突き出し、呪文を唱える。
「ボミオス。」
急に男たちの足が、腕が重くなる。

アバンの動きを目で追うことができない。
　間髪入れず、アバンは動きの鈍った男たちの頭を、腕を狙い、剣を繰り出していく。アバンは、順に、男たちの剣を叩き落していった。
　アバンは、さらに、わざと男たちの腕を切りつけた。
　出血と痛みで、男たちがうずくまった。
　アバンは、右手に持った剣を、しゃがみこんだ年長の男の顔に突き付けた。
　ひやりとした金属の感触を喉に受け、男は、顎を上げた。自分を見下ろすアバンと目が合った。
　勇者と呼ばれた男は、温厚な穏やかな男だと聞いていた。
　だが、それがなんだ。
　今、目の前にいるこの男は、氷のような目で自分を見下ろしている。勇者がほんの少し、力を入れれば、喉が切られる。だがそれを何とも思っていないような、冷たい瞳だった。
　アバンは、低い声で吐き捨てた。
「この場で殺すことは簡単だ。できれば私もそうしたい。」
　そして、年長の男の喉元に当てられた剣先に力がこもったのを、男は感じた。
　男は目を閉じた。覚悟を決めざるを得なかった。
　男の耳に、アバンの言葉が響く。
「だが、お前たちの処分は王家にお任せすると決めている。
　さあ、残らず吐いてもらおうか・・・お前たちに指示をした、我が国の重鎮の名を。」
　男たちはがっくりとうなだれた。
　もはや逃げる道はなかった。

　男たちをカール王家に引き渡した翌日、アバンは、カール城のバルコニーから空を見ていた。
　広い空が広がっている。
　風がそよぎ、見渡す限りの緑の大地を吹き抜けている。
　アバンが視線を落とすと、城壁の向こうに、緑のじゅうたんがその目に映った。

郊外に面したこの窓の外には、カールの豊かな自然が広がっていた。
　我が祖国、カール。
　アバンは、吹き抜ける風をその身に受けながら、思いを馳せた。
　豊かな森が広がる国土。
　港町には漁の賑わいがあり、平野の穀倉地帯には、金色の小麦畑が広がっていた。
　牧草の生えた広大な土地に、羊たちが群れをなす。
　王都をはじめ、街には活気があり、豊富な地下資源に支えられた、工業も盛んな裕福な国だった。
　魔王軍の侵攻に遭い、いったんは騎士団が壊滅したものの、若年者を中心に再結成し、アバンが帰還するまで、彼らが城や街を守ってきた。それだけの気概、志のある民に支えられた国だった。
　そして、それを率いる希望の女神。
　年若いながら毅然とした姿で国民の前に立ち、魔王軍への対抗を鼓舞し、先頭に立って戦ってきた。
　勇者アバンを育んだ、自然も豊かな強国カール。
　祖国のために、いま、アバンができることは一つしかなかった。
　忘れえぬ光景を目に焼き付けるように、アバンは、バルコニーの外を眺めていた。
　不意に、ドアがノックされた。
「どうぞ。」
　入室を許可すると、ドアの向こうには侍女が控えていた。
「アバン様、陛下がお待ちです。」
　アバンはマントを翻し、ドアの外に歩みを進めた。

　勇者の凱旋報告があるとの触れが出て、カール王都市民は王城のバルコニーを望む中庭に集まった。普段ならここは、国王や王族が市民に向かって手を振り、お声をかける姿を、市民が眺める場所だった。祝い事や、新年の行事の際には、国王陛下や王族のお出ましがあり、市民も集まるのが常だった。
　その、普段なら国王が人々に向かって声をかけるバルコニーに、この日は、王族ではない男が立っていた。

カールの歴史上、極めてまれなことだった。
　バルコニーの中央には、魔王を倒し、世界の暗雲を払った勇者。
　その両脇に、国王と王女、さらにその背後には、勇者とともに魔王と戦った騎士団長に大魔導士。
　まるで、勇者がカール王家を率いているかの錯覚を与える構図であった。
　アバンは、バルコニーの最前部に足を進めると、視線を左右に流し、周囲を見回した。王城の中庭には、大勢のカール国民が集まっていた。
　アバンは、いったん目を閉じ、呼吸を整えた。
—我が祖国カール。そこに生きる皆さん。
　我が言葉が、これからの世の礎とならんことを。
　想いよ届けと願い、アバンは目を開けた。
　そして、澄み渡る声で人々に語り掛けた。

「カール国民の皆さん。
　魔王ハドラーは倒れ、世界の暗雲は晴れました。
　今後は、魔王軍の脅威におびえることもありません。命や財産が不当に奪われる暗黒の時は終わりました。
　この戦いは、私一人では成し遂げることも、こうして祖国に帰還することもできませんでした。
　私を支えてくれ、共に戦ってくれた仲間たち。
　戦士ロカ。
　僧侶レイラ。
　拳聖ブロキーナ。
　大魔導士マトリフ。
　彼らの助けがあってこその今日があります。
　そして、国王陛下。
　フローラ王女。
　カール王家からの惜しみない支援がありました。
　国王陛下には、深く御礼申し上げます。」
　アバンはそこで言葉を切った。
　そして、もう一度、視線を巡らせ、人々を見渡し、言葉をつづけ

た。
「皆さん、魔王ハドラーは倒れましたが、いつまた同様の脅威が生じるかはわかりません。
　世界に異変が生じるか、わかりません。
　私は、この戦いを生き抜いた者として、私の得た経験、技術、知識を次代に受け継ぐ努めがあります。
　再び世界に暗雲が立ち込めたとき、それを払える者を見つけ、育てていくことが、次なる私の戦いであり、責務です。
　それをこの場にとどまることでではなく、世界を見ながら果たしていこうと思っています。
　私は、これまでの人生やこの戦いの中で、魔族やモンスターに助けられたことがありました。彼らに教えられたこともありました。
　魔王のいない今、魔族やモンスターたちへの魔王の干渉は止みました。
　そのいま、魔族やモンスターを知ることが、次なる戦いを未然に防ぎ、あるいは、戦い抜くための知恵となるかもしれません。」
　アバンは、今の時点で言える精一杯のことを口にした。
　魔王軍の侵攻の記憶が新しい今、魔族やモンスターに拒否反応を示す者は多い。アバン自身にも、まだ目指すべき道は見えていない。
　だが、別の見方があるかもしれないということ、自分の言葉に少しでも心惹かれる者が現れることを期待して、アバンは、いま人々に通じるかもしれない限界の言葉を紡いだ。
　そして、アバンは宣言をする。
「私は、そのことを確かめたいと思います。
　そのために、旅に出ます。
　私を受けつぐ者を育てるために。
　魔族やモンスターたちを知るために。
　それが、次なる戦いを防ぎ、あるいは生き抜くことになると信じます。
　ですが、私の心は、常に我が祖国カールとともにあります。
　この身が祖国にあらずとも、私の忠誠は常に国王陛下とフローラ様に、私の思いは常に祖国に捧げられています。

カール国民の皆さん。
　どうか、私のわがままをお許しください。
　そして、本願を果たし、いつかまた私が帰還するその時まで、どうぞ、カール王国とカール王家をお守りください。
　カール王家もまた、その力を尽くし、皆様の生命、財産をお守りしてくださいます。
　我らは、『希望の女神』のもとにある。」
　最後に、ひときわよく通る澄んだアバンの声が中庭に響き渡った。
「我らが祖国、カール王国に栄光あれ！！」
　人々の歓声がわっと沸き起こった。
　それにアバンが、国王が、フローラ王女が手を振って応える。
　人々の歓声が響き渡る中、後列にいた、ロカとマトリフは、そっとバルコニーを後にした。

　控室にいち早く戻ったロカとマトリフを見て、レイラはほっと胸をなでおろした。
　レイラの胸には、幼いマァムが抱きかかえられていた。
　ロカがレイラに呼びかけた。
「聞こえるか、レイラ。」
　レイラはうなずいた。人々の歓声は、この部屋にも届いていた。
「ええ。さすが、アバン様ね。」
　ロカは、マトリフを振り返った。
「マトリフ。ありがとう。世話になったな。」
　しんみりとした表情でそういうロカに、マトリフは皮肉そうな笑みを浮かべた。
「手続きは終わったのか？」
　マトリフの言葉に、ロカはうなずいた。
「陛下にはお許しをいただいた。
　騎士団を辞めることも、カールを出ることも。
　すぐに、レイラとマァムと一緒に、ネイル村に行く。」
　ネイル村は、レイラの育った、マァムが生まれた村だった。
　ロカの言葉や表情が、いやに寂しそうだったから、マトリフは、

わざとぶっきらぼうに答えた。
「しゃあねえな。送ってってやるよ。ルーラでな。
　俺もそのままトンズラするかな。」
　マトリフの言葉に、ロカは聞き返した。
「残らないのか。」
　マトリフは、破格の待遇で、いまはカール王家の食客扱いになっているはずだった。だが、マトリフは、こともなげに言った。
「俺はもともとカール国民じゃねえよ。」
　ロカはふと、今までのマトリフの言動を思い出した。
　王宮内の情報を集めて権力関係を分析し、噂話にまで耳を澄ませ、アバンの身の回りに気をつけてやれとロカに忠告したのは、何故だったのか。
　ロカはマトリフに尋ねた。
「・・・なぁ、マトリフ、あんたが今までカールにいたのは、もしかして、アバンや俺たちのためだったのか？」
　マトリフは、にやりと笑って、ロカに答えた。
「・・・ばーか。この城に、若い姉ちゃんがたくさんいるからだよ。」

　窓の外からは民衆の歓声が流れ込んできていた。
アバンの演説に沸くその声を聞きながら、カール王国貴族院議長はため息を吐いた。
「見事なものだな・・・。あの若造、戦うだけではないな。政治的な嗅覚も持ち合わせている。」
　議長の背後には、側仕えの男が控えていた。
「我らの手の者は逃げおおせましたが、その他の者は捕らえられております。・・・始末したほうがよろしいでしょうか。」
　だが、議長の男は一言で側仕えの男の言葉を切り捨てた。
「放っておけ。どうせ我らにはたどり着けん。まあ、あの馬鹿王子には司直の手が及ぼうがな。」
　そして、彼は、民衆の歓声を聞きながら、それをもたらした若い男の姿を思い浮かべた。
「あの者、せっかく王家への不満が沸き起こるところを抑え込み

おったわ。子どもが犠牲になれば、市民感情もあおられると思ったがな。やはり殺しそこなったのが失敗だったか。」
　側仕えの男は恐縮して頭を下げた。
「申し訳ございません。」
　だが、それにも関心がないかのように、議長の男は答えた。
「よい。奴のほうが一枚上手だったということだ。
　やむを得んな。しばらくは、フローラ様に我が国の主権をお預けするほかはないか。」
　そしてまた、ため息を吐いた。
「しかし、あの若さでな・・・。
　勇者アバン。
　あ奴が本当にこの国に舞い戻った時には、我らの大きな脅威になるであろうな・・・。」
　苦い色をその面に浮かべ、議長の男は、数年先の未来に思いを馳せた。

　先王の「王子」と呼ばれた男は、カール王城の廊下で、憲兵たちに行く手を遮られた。
　無礼な行いに、彼は憲兵隊を叱りつけようと声を上げた。
「お前たち、何をしている！そこを退け！」
　すると、憲兵たちの壁が割れ、その背後からフローラ王女が姿を現した。
　王子はフローラにも怒りをぶつけた。
「フローラ、これはどういうことだ。無礼ではないか！」
　だがフローラは、その声にひるむことなく、毅然とした目で従兄弟を見据えた。
「お心当たりは、ご自分のお胸の内にありましょう。
　騎士団長宅襲撃事件について、お伺いしたいことがございます。
　ご同行、願えますね。」
　フローラは、氷のような冷たい目のまま、笑みを浮かべていた。
　その不釣り合いさが、相手の肝を冷やした。
　この日を境に、彼の姿は王城から消えることとなった。その後、彼は、遠く離れた王家の古城に蟄居したとの噂が流れた。

アバンはテランの宿で、厚手のノートにペンを走らせていた。
時刻はすでに宵であり、デスクの上のランプだけが、狭い範囲を照らしていた。
部屋の端に置かれたベッドでは、ヒュンケルが体を横たえている。アバンがカールを出てまだ数日足らず。ヒュンケルの容態も、一時期よりはだいぶ良くなったが、幼い彼の身体はまだ完治には程遠く、寝たり起きたりの日々が続いていた。目を覚ました時に、水分や食事をとるのが精いっぱいだった。
アバンは、今までの旅で得た知識や技術、経験を書物にまとめようと思い、ヒュンケルの回復を待つ傍ら、ノートにペンを走らせていた。
それに、これからの旅で得た知見も、記録にとどめて行こうと考えていた。
人間の技術や知識だけではなく、魔族のこと、モンスターのことも。
静養をするには、テランはよい国だった。
人も少ないので、まだ人間社会に馴染んでいないヒュンケルへの負担も少ない。こうした小さな国や村から順に慣れていけばいいと思う。
テランは小国だったが、巡礼者も多く、宿は充実していた。そのうちの１軒にまとまった金を払って、アバンはそこに長期滞在することにしていた。
アバンは、カールを出てから眼鏡をかけ始めた。視力は悪くないので、もちろん伊達だ。
以前、魔王討伐の旅に出る前にも眼鏡をかけていたが、旅に出るときに、アバンはその眼鏡をフローラに預けていた。
今回、アバンがカールを出るときに、フローラはアバンを呼び止め、その眼鏡を彼に返したのだった。
—お預かりしていた、あなたの平和の証です。
そのフローラの目に涙はなく、毅然としていた。
アバンは眼鏡を外すと、その太い黒縁の無機質な眼鏡をじっと見つめた。

—ずるいですねえ。私が必死で戦っていた間も、あなたはあの方とともにあったんですね。
　アバンは、苦笑すると、その眼鏡を耳にかけた。
　そうしてまた作業に戻った。
　眼鏡をかけてペンを走らせていると、アバンは、それだけで文筆家にも見える風体であった。
　アバンが文筆をつづけていると、ベッドから呼びかけられた。
「先生・・・。」
　ヒュンケルが目を覚ましたのだった。
　アバンは、ヒュンケルの元に歩み寄った。
「目が覚めてしましたか？ごめんなさい。明るかったですかね。
　でも起きたのなら、お水、飲めそうですか？体は起こせますか？」
「はい・・・。」
　ヒュンケルは、アバンに支えられながら、ゆっくりと体を起こし、ベッドの上に座る格好になった。ぼんやりとした表情をしている。
　ヒュンケルは、あの襲撃事件以降、目を覚ますたびに、アバンに同じことを尋ねていた。命が危険にさらされる、あれだけのことがあったのだ。精神が不安定になっていても当然だった。同じ問いを繰り返すのも、そのせいなのだろうと思っていたが、もしかしたら、記憶自体、混濁してきているのかもしれないとアバンは思っていた。
　ヒュンケルは、すでに何度も繰り返してきた同じ問いをアバンに投げかけた。
「先生・・・あの子は、大丈夫ですか？無事でしたか？」
　アバンもまた、微笑んで、同じ答えを返した。
「ええ、大丈夫ですよ。無事です。」
　アバンの答えを聞くと、ヒュンケルはほっとしたような笑みを浮かべた。
　アバンは、ヒュンケルに水の入ったコップを差し出した。
「さあ、あなたも水分を取らないとね。ゆっくりでいいですよ。」
　ヒュンケルは、アバンに差し出されたコップを両手で受け取り、

少しずつ、喉に流し込んでいった。
「さ、まだ夜中です。朝までゆっくり休んでください。」
　そう言って、アバンは、ヒュンケルの身体をまたベッドに横たえた。
　すぐにヒュンケルは目を閉じ、しばらくすると、腹部が上下しはじめ、寝入ったことをアバンに知らせた。
　アバンは、まだ小さなヒュンケルの頭をそっと撫でた。
「マァムは無事ですよ、ヒュンケル。
　でも、これからは、私とあなた、二人きりです。
　いつかまた、あの子に会いに行きましょうね・・・。」
　宵闇に、アバンのつぶやきが消えていった。